

～旧約聖書を読んで感じること～ (65) ダビデに進言するテコアの女



ダビデ王の前のテコアの女 Caspar Luiken

ダビデの將軍ヨアブはダビデのアブサロムを惜しむ思いを察し、ベツレヘム近郊のテコアから、一人の知恵のある女を呼び寄せ、すべきこと、語るべき言葉を彼女に与え、ダビデのもとへ連れて来ました。

「喪を装ってほしい。喪服を着、化粧もせず、長い間死者のために喪に服しているように装うのだ。そして王のもとに行き、こう語りなさい。」(サム下 14:2)

彼女は「二人の息子が喧嘩しても、仲裁に立つものがなく、一人がもう一人を殺した。彼を親族は赦さず、殺せと言う。彼を失えば、跡継ぎも嗣業も絶える」と訴えたのです。喪服の女の悲しげな様子を見ただけで、ダビデはすぐに同情の思いで一杯になります。ダビデはこの訴えを聞き、即座に「この男の命を救う命令を出す」と答えます。いかにもダビデらしい単純さです。テコアの女は「悪いのは私の家族であり、息子は律法違反をしているのだから、王が律法違反に加担する恐れがある」と付け加えます。

ダビデはあくまでも王権によって親族を処罰すると言います。テコアの女は更に、神に心を向け、報復を繰り返すことがないようにと、命の大切さを訴えます。

「王様、どうかあなたの神、主に心をお留めください。血の復讐をする者が殺戮を繰り返すことのあるように。彼らがわたしの息子を断ち滅ぼしてしまいませんかのように。」(サム下 14:11)

ダビデが命の大事さを実感したことを悟って、テコアの女は「もう一言述べさせて下さい」と言います。そしていきなりダビデの言葉を逆手にとって、ダビデを責めながら、訴えました。

「主君である王様、それではなぜ、神の民に対してあなたはこのようなふるまわれるのでしょうか。王様御自身、追放された方を連れ戻そうとなさいませぬ。王様の今回の御判断によるなら、王様は責められることになります。わたしたちは皆、死ぬべきもの、地に流されれば、再び集めることのできない水のようなものでございます。神は、追放された者が神からも追放されたままになることをお望みになりませぬ。そうならないように取り計らってくださいませぬ。」(サム下 14:13)

この言葉を聞いて、ダビデはヨアブの指図でテコアの女が送られたことを悟りました。女はダビデを「神の御使いのように善と悪を聞き分けられる方、主が共におられますように」と祝福しました。

王は裁き司の仕事も担っていたのです。王の言葉が生殺与奪の権でした。アブサロムを赦すことによって、報復を断つと判断したのです。そしてアブサロムは戻されました。

当時「神の箱」がエルサレムに安置されていても、祭司や預言者たちはダビデのために働く廷臣のような存在で、サムエルのように祈る祭司はいませんでしたし、モーセの名、律法という言葉もサムエル亡きあとは話す人もいなかったのです。知恵あるテコアの女の言葉で、ダビデも仲裁する力がなかったことを自覚し、命が断たれば、「覆水盆に返らず」であり、神のみ心は命を守られることであると知ったのです。ヨアブの忠心、テコアの女の勇気と知恵にダビデは救われています。



アブサロムを赦すダビデ William Blake